

宮城県肉用牛改良に係る種雄牛造成方針(H22.6)

1 種雄牛造成方針 –全国の肉牛関係者の感嘆の声を聞こう–

- ・ 本県における現在の繁殖雌牛は、県外導入もしくは県外種雄牛の精液を利用して生産された繁殖雌牛の保留が進み、また、子牛生産用の交配も県外種雄牛の利用が多く、県内子牛市場や食肉市場において血統的な特徴が薄れてきている。
- ・ 平成 21 年度子牛市場データ、繁殖雌牛（子牛の母牛）21,235 頭の血統構成を調査した（図 1）。結果、気高・栄光系が 33%，茂金系が 29%，田尻系が 20%，藤良系が 18%であった。平成 12 年度（図 2）と比べると気高・栄光系が 25%増加している。

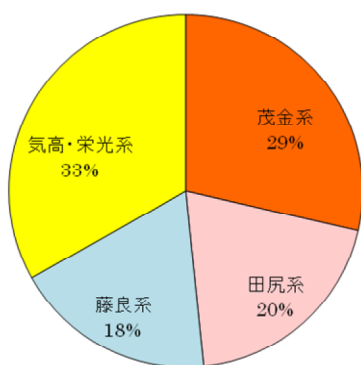


図1: H21 繁殖雌牛系統割合(子牛市場上場牛)

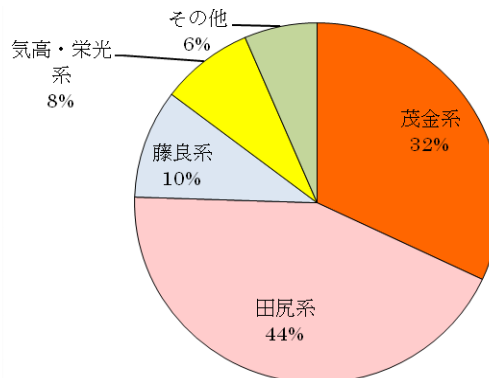


図2: H12 繁殖雌牛系統割合(子牛市場上場牛)

- ・ このため、今後 10 年程度は宮城県の特徴である「茂重波」の血統を考慮した種雄牛造成を継続するとともに、増体能力および肉質に優れる種雄牛を造成し、もって肉質と肉量に優れた魅力のある“宮城の牛”を全国にアピールする。
- ・ また、現在の繁殖雌牛の持つ血統的特徴を勘案し、県内各地域で生産された育成雌牛の県内保留に努め、多彩な血統と斉一性に富む“宮城の雌牛群”の整備を進める。

2 タイプ別種雄牛造成 –強固で多彩な種雄牛造成–

① 造成タイプ 1： 肉質（茂金系，田尻系）

- ・ 茂金系遺伝子の固定を図り，茂重波の特徴を強く有した系統の作出により，宮城県独自の系統を維持する。
- ・ 茂金系統等の維持を図るとともに，田尻系の持つ“肉質”の良さを組み入れた改良を図る。
- ・ 枝肉重量の育種価には留意する。

② 造成タイプ 2： 体型・質量兼備（気高系，藤良系）

- ・ 造成タイプ 1 と平行し，体型および質量兼備を意識した，多彩な系統を作出する。
- ・ BMS の育種価には留意する。

3 造成方法 –連携とスピード–

- ① 基礎雌牛の選定
 - ・ 繁殖雌牛の産子枝肉情報と血縁情報を活用した産肉能力等の遺伝的能力評価により、優良雌牛の増殖と基礎雌牛群の整備を図り、雌側からの改良促進を行う。
 - ・ 指定交配を行う基礎雌牛群は、和牛育種組合・和牛改良組合等の協力のもと、この種雄牛造成方針に基づき、産肉能力育種価に加えて、審査得点、発育等体型評価を加味して選定を進める。
- ② 指定交配
 - ・ 基礎雌牛の系統及び上記産肉能力等に応じて県基幹種雄牛を指定するが、改良上必要な場合は県外の優良種雄牛を指定する。
- ③ 改良速度の向上
 - ・ 検定方法や受精卵移植技術の活用による能力評価方法を検討し、改良速度を上げる。
- ④ 新技術の活用
 - ・ 産肉能力および遺伝的不良形質に関連したDNA解析を進め、選抜への活用を図る。

4 能力に関する改良目標 –バランスの確保–

- ① 産肉能力

早期に十分な体重に達し、かつバラツキの少ないロース芯面積と脂肪交雑基準値を確保できる種畜の作出を図る。

また、脂肪酸組成など肉のおいしさ評価に関する科学的知見の蓄積に努め、今後の改良目標になりうるか検討する。
- ② 飼料利用性

生産コストを抑制し、生産性向上を図るため、直接検定時の粗飼料摂取量や余剰飼料摂取量^(注1)という飼料利用性に関する指標を利用する。
- ③ 繁殖性

繁殖雌牛の持つ繁殖能力を最大限活かし、1年1産を確実に実施するため、子牛生産指数^(注2)等の繁殖性に関する指標を活用した基礎雌牛、種雄牛の選抜を行う。

注1：余剰飼料摂取量

維持と増体に必要な最低限の飼料の量より、摂取した飼料が多いか少ないかを示す指標

注2：子牛生産指数

4歳を超えて初めて迎えた分娩までに出産した頭数を、4歳時点に換算した値

5 タイプ別改良目標種雄牛割合 –目標基幹種雄牛割合–

- ① 造成タイプ1 50%
- ② 造成タイプ2 50%